

ペンギンの会 ニュース

No.37 2018.12



ペンギンの会を支えて下さっている皆さん、いかがお過ごしでしょうか。この夏は酷暑でほとんど外出も出来ず、家にこもっていました。最近になって、やっとすこしやすくなってきましたね。

先日 10 月 28 日(日)に、東日本大震災・熊本地震・日本各地で起こった大災害の被災「障害」者救援カンパを四条河原町のいつもの場所で行なってきました。今回は、他の団体等も街頭に立ってアピールをされる人達が多かったのもあったのか、きびしい 3 時間でした。ビラもいつもより受け取ってもらえず、やはり回を重ねるごとに「風化させられている」と感じます。

私たちは 3.11 の東日本大震災直後から街頭に立ち救援カンパを行なってきましたが、

「障害」者以外の「健常」者の市民団体の人達は「ビラがはけなくなり、カンパも少ししか集まらなくなったら街頭に立たなくなったよ」とよく聞いていました。私たち「障害」当事者は、被災した「障害」者に寄り添って共に闘っていると伝える為にも、強い意志をもってアピールし続けることが必要ではないかと考えます。私に、私たちに出来ることは、街頭に立ち続け、被災した「障害」者がどんな困難な日常を強いられているのかを訴えていくことなのだと、今回改めて思われました。

支援する側が萎えていては、風化が進む一方です。そして、「障害」者だから、目に見える成果がなくてもやり続け、自分を問う作業をしてゆくことが、自分を生きてゆ

くためにも必要なのだらうと思っています。だから、体のゆるす限り、やりつづけたと思っています。

とはいえ、もっと声を出して訴えアピールしたいのに、首に負荷をかけると頭痛が出て、左眼の視神経がさらに萎縮してゆくため、今回は拡声器を使わず、口パクで訴えていました。でも、口パクでも 3 時間やっている、その晩は首がパンパンになり、やはり頭痛が出てしまい大変でした。次回には、私の小さな声でもよく通るような良い拡声器を導入しようと考えています。

今回、参加して下さった JCIL、介護者の皆さん、ペンギンの会に関わって下さった皆さん、本当にお疲れ様でした。今後とも一緒に街頭に立ち続けてください。よろしくお願いいたします。

ペンギンの会も、メンバーそれぞれ色々と問題を抱えています、なんとか現状を維持させています。生前、三宅光男さんが、『障害』者は生きていくことだけで大変やから、『障害』者は生きているだけで運動になるんや。それが『障害』者運動なんや」と言われていました。その言葉に励まされながら、今の私に出来ることを考え続け、生かされてゆきたいと願っています。これからもペンギンの会を支え続けてください。よろしくお願いいたします。

李清美



今日も何気ない一日が始まります。工事の音が聞こえる毎日です。

京都はオリンピックに向けてホテル建設です。私は何回オリンピックの開催を見てきたか憶えていないほど歳を重ねてしまいました。しかし、この世の中は、障害者に対してどう変わったのでしょうか？

ふと、夏目漱石の『こころ』の中の「鉛の飯を食う」という言葉が頭からはなれないです。また、新しい年がやって来るね。

岡安聖美

筋主汗（キンジス・ハーン）自伝 その 五

『筋主汗（キンジス・ハーン） 伏見区は国道24号線沿いにおいて、自立生活を始めること』

“ユグチマコト” 改め “ユグ”
（“チ”が発音しにくい気がしてたので）

今回の題名は、何か漠然としすぎていて、いつもの“もったいぶった感”がありませんが、話の舞台がほとんど“伏見区は国道24号線沿い”なので、このまま書いていきます。

前号から書いている高橋公子さんに加えて、90年代末当時のペンギンの会には他にも5人の重度障害者がおられました。また会員としてではありませんが、かつての“青い芝”からの縁などでつながりを持つ、主に関西各地の障害者の方々もおられ、それはそれは“強烈な個性”で自立生活を展開している人たちばかりでした。

自立生活と言っても、その形態は各々の障害の度合いに応じて千差万別で、ひとり暮らしで介護の段取りを万端行き渡らせて生活していた方、日常生活には介護がいらない軽度障害者同士で共同生活のような形をとっている方、健常者のパートナーがいる方、パートナーがともに重度障害者同士で介護を入れている方…。

誰一人同じスタイルが無い“バラエティーに富んだ”状態に触発されて、1997年の秋にユグも親と同居している実家から出て、ある地域の一室を借りて自立生活を始めました。

当時、ユグの障害ははるかに軽度で二足歩行可能で、介護の必要がない状態でした。

ただ、このときは自立生活への“腹のくくり方”が全く甘かったせいで、ほぼ半年ほどで実家に戻る結果となってしまいました（もう少し詳しく書くべきですが、この話の方面にハンドルを切ると、“24号線沿い”に出られないので…でもこのあたりの“腹のくくり方”の話は自立生活にはきわめて重要なので、今後のニュースで必ず触れるということ）。

それから3年半、筋ジスの障害が緩やかに進行していく中、生家で営まれていた会社の倒産・閉鎖や、短期間ながら障害者雇用枠を利用して某企業でお世話になるなど、ユグ個人の生活にもそれなりの転機や変化が起きていきましたが、ペンギンの会での活動には途絶えることなく関わらせてもらっていました。

そして2001年秋に今度こそはと思い立ち、ふたたび生家を出ることにし、伏見区は“国道24号線沿いの”大きな郵便局の近くで一室を借りて住み始めました（ようやく“24号線”に出られました）。

この時点でもまだ介護の必要がありませんでした。

ここで、“24号線”とユグの関係について少し。

国道24号線は烏丸五条交差点を起点に、宇治 - 奈良 - 和歌山を結ぶ重要な一般国道です。伏見区では区のほぼ真ん中を南北に通じ、日々渋滞の車列が途切れることがあります。またその周辺の伏見区民の主な生活道路であり、たとえば“竹田久保町交差点”などはラジオで数時間ごとに交通情報が伝えられる、日々この国道を走るドライバーなら誰でも知っているスポットです。

そしてこの国道は、ユグが18才の頃か



ら慣れ親しんだ道路でもあります（今年で27年目。もう人生の半分以上です）。

ユグは竹田久保町交差点にほど近い龍谷大学に18歳から通っていました。すでに当時からも学生が多かった（第2次ベビーブーム世代）ため、若い世代向けのカラオケやら居酒屋やらが“24号線沿い”にも相当数あり、そこら辺りでは知らない場所がないくらいでした。

そして大学を卒業した1年半後に、ペンギンの会を紹介され、高橋公子さんと出会い、それまでの障害者としての自覚の無さに対して、“ガツンとかまされ”そして“完全に度肝を抜かれた”ことは、ペンギンニュース34・36号にも書いた通りです（“ペンギンの会”ホームページにバックナンバーを掲載しています）。

“愛あるダメ出し”をしてくれた公子さんのことを語るのなら、もう一人大きな影響を与えられた、三宅光男さんの話をしな

い訳にはいきません（単に“三宅さん”と書くほうが、敬意も愛情も数倍大きくこもっているのですが）。

ここでペンギンニュース33号5頁のユグの文章を以下に。

“自立生活を始めた20年近く前、ユグチはまだ軽度障害で、車いすで生活をしておらず、暮らしの資金はここでは詳しく書きませんが、一人で完全に生活していくにはかなりの無理がありました。

当時同じ伏見区のすぐ近くに住んでいたこともあり、三宅さんのご厚意で、お宅でたびたび食事をさせて頂いたことを始め、とても書き尽くせないくらい、ほぼ居候に近い状態で、いくら感謝しても足りないほ

どのお世話になってきました。親子ほどの^{せわ}年の差（23歳差）で、三宅さんにここまで物心両面で支えて頂いていた障害当事者は、おそらくユグチだけだと思います。

三宅さんは人生の半分以上を伏見区で過ごしておられ、ユグがたびたびお邪魔したお住まいは、竹田久保町交差点すぐのところでした（つまり龍大のすぐ近所!?!）。

ペンギンの会に入ってから半年の1997年夏に初めてお宅へ案内して頂いた時、乗せ



在りし日の三宅さん

てもらったタクシーが慣れ親しんだあの交差点に近づくにつれ、ユグはちょっと興奮してこう言ったのを覚えています。

「え～、まさか三宅さん家ってここらへんなんですか!？」

と言うのも、その近くに、当時「村一番」という龍大生御用達の大きな居酒屋があり、聞けば三宅さんたちもよく飲みに来ていたというのです。

他にも三宅さんがお酒が入ると決まって、「おっしゃ、カラオケ行こ！」と連れてもらったMKのレジャー施設があったのですが、そこも龍大時代のたまり場の一つだったので、三宅さんたちとよくこ^{はな}う話していました。

「そんだけ時期が重なってたのに、お互いよう顔合わさんかったこっちゃんあ」

三宅さん宅がそれこそ“知っているところの話ではない”ような場所だったこともあり、ペンギンの会で公子さんに“ガツンとかまされて”半年、この時からユグはすっかり打ち解けたというか、同じくペンギンの会で出会った人たちにも本物の縁を感じ、ただの腰かけではない関わりが始まったのです。

こうした関係ができたのは、三宅さんが“24号線沿い”の地域で自立生活を続けておられたからだと思います。

2001年秋にユグが“24号線沿い”で自立生活を再開してからは、まだ介護を入れずに一人住まいだったのを氣遣って下さり、「わざわざ一人分のメシ作らんでも、（常に数人で食事をする）わしとこで一緒に食うたらエエ」というお言葉に甘えて食

事をさせて頂いてました。

そして“ほぼ居候に近い状態で…”自分が借りている部屋にも帰らずに居続けさせてもらうことなどしょっちゅうで、今から思えばご迷惑のかけ通しでした。（部屋着用のジャージまで買って置いてもらっていたぐらいです）

その日々の中で三宅さんと自立生活のことやら介護のことやら、その他様々な硬軟とりまぜた話を問わず語りで聴かせていただいた時間は本当に何ものにも代え難い貴重なものでした。

また他のペンギンの会メンバーの方も書いていますが、確かに三宅さんはかつて自分が属していた関西青い芝と、その当時の話をされることはほとんどありませんでした。

でも長い時間を共に過ごさせてもらう中で、昔の自分が経験してきたことをふっと話してくれはることもありました。その内容も養護学校時代から、障害者運動関係で三宅さんが言える範囲での話、はたまた何と若い頃の恋愛がらみでの笑える失敗談まで!?ふだんペンギンの会で自身の話題となると絶妙のタイミングで矛先をそらしていた三宅さんが、自分自身の話をされる時に居合わせたというのは思えば稀有な体験でした。

ことに長年住んでおられた伏見・深草界隈の話ともなると、いつも話題には事欠きませんでした。あの地域でわからない場所など、三宅さんに聞けば（たいていは冗談交じりで）すぐに教えてもらえました。

「あ～、あそこはこないだまで〇〇やったとこでなあ…ちょっと段差があって今のユグちゃんには入りにくいかも知れんわ」

「あそこの店わしが行ったら、いつもネー

ちゃんがいや～な顔しょんねん（笑）
「あのうどん屋行ったらな～、なんもいわんでもバイトのネーちゃん、勝手に生ビール持って来よんねん」

↑↑↑

「勝手には持って来いひん、来いひん！」
と周りの人間がツッコミ入れるのが基本。

本当に大事な話からバカバカしい話題まで、肝胆相照らす（!?）もの同士で交わされる会話など、どこの人間関係でも当たり前の風景かも知れませんが、地域の中で自立した生活を送る何人かの障害者同士がひとつどころ（今回は“24号線沿い”）に集まって…ということになると、“当たり前”などと簡単には言えない――というのが現実だと思います。

その稀有な時間を三宅さんたちと充分すぎるほど共有させていただいたことは、ユグの自立生活に、いや、というよりユグの人生にとって何ものにも代え難い財産と言ってもよいでしょう。

今回も非常にとりとめの無い文章になってしまいましたが、最後は“24号線”で締めくくりたいと思います。

今のペンギンの会の事務所もかつての三宅さん宅すぐ近くの“竹田久保町交差点”そばです。

不動産業の方にこの物件をご紹介いただいた時、ユグはさすがにこう思いました。

「オレという人間はつ

くづくこの竹田久保町…否、“24号線沿い”に縁があるんやなあ」

ユグの学生時代を振り返る上で“24号線沿い”を外すわけにはいきません。

また、三宅さん宅にお邪魔するのに、（ユグが住んでいた）墨染のあたりから竹田久保町交差点まで、何度この“24号線沿い”を北上したかわかりません。

ペンギンの事務所も“24号線沿い”。そして、ユグが現在住んでいる向島も“24号線沿い”です。

人間が最終的にどこで人生を送って行くかなど、他人はおろかその本人にすら予測することは難しい。ただ、現時点のユグにとって、自立生活の舞台が今も昔も変わらずに“24号線沿い”なのは確かなようです。最後までありがとうございました。



『沖縄スパイ戦史』の舞台 恩納村にて

11月1日～5日までの日程で、チカラタンナーパの会の皆さんに介護をお願いして同行させていただき、おかげ様で今年2回目の沖縄訪問の機会を得ることができた。今回も充実したスケジュールで平和を学ぶ非常に濃い研修旅行であった。やはり衝撃を受けたのは辺野古基地建設反対の海上行動へ参加した時の海上保安庁の「海猿」たちの横暴さだったが、それについては一緒に行った周作の報告に任せるとして、私からは主に1日目にSさんに案内していただいた恩納村（おんなそん）の戦跡についての報告をしたい。

Sさんは大学時代を京都で過ごされ、チカラタンナーパのYさんの後輩であり、現在のお仕事は恩納村博物館事務局で「恩納村史編纂係・戦争編担当」をされているとのことだった。初めに訪れた恩納村博物館展示室の入口に置かれていた、昔の葬送の野辺送りに使われた棺を墓地に運ぶ輿が目を引いた。屋根の付いた神輿のような形で顔料の赤が鮮やかに残っていて壁に蓮の花が描かれ、柱に龍をあしらってあるところが沖縄らしかった。展示室では農具や漁業に使われた道具や島豆腐を作る石臼が印象的だった。ここではSさんが展示を担当しておられる戦時中の展示もあるらしいのだが、時間が無く見学できなかったのが残念だった。

まず案内していただいたのは、宇加地に

あるコージガマという原生林の生い茂る山中にあるガマだった。このコージガマは沖縄戦の時、近隣の人々が避難したら一人も犠牲者を出さずに全員が生き延びることができたという稀有なガマで、そのことに感謝して多くの人々が見学しやすいように、山道の急な所には階段状になるように角材が埋められたり、ほとんどの道沿いに手すりが付けられたりして地区の人々によって大切に保存されているようだ。



周作はAさんに背負ってもらい登ることができたが、まさか私を背負える人はいないだろうと思うので（重すぎて(^_^）、手すりに掴まりながら、脚があがりにくい所は一步一步手伝ってあげてもらい、手すりが途切れている所は腕を持ってもらいしながら、何とか登ってみることができた。山登りは35年程前（元気に歩いていた頃）に比良山に登って以来で、それで卒業と思っ

ていたが、家の中以外、外ではほとんど歩かなくなった今になってこんな体験ができるとは!! ひとえに助けてくれる人たちがいてこそその貴重な体験だった。



コージガマ

ガマの中には入れなかったがガマの隣にも洞があり、骨壺が安置されていてナーグシクという拝所になっている。その横にも展望台のように水平に岩が突き出したところがあり、戦時中は子どもがそこから敵機が来ないか見張りをすることもあったようだ。その場所の後ろの岩は背が高く細長いトンネルのように中が通れる形になっていて、その辺りは自然の造形に守られているようなとても神聖な雰囲気のある場所であった。Sさんも「ここは斎場御嶽（せーふあうたき）（沖縄県南城市にある世界文化遺産の聖地）ではないが、この地区の人々にとっては御嶽のような神聖な場所です。」と説明して下さった。沖縄に移住している友人が自然のままの蔓草や樹木が生い茂る中にある斎場御嶽周辺を描いたイラストを以前に観たことがあり、そのような場所に行ってみたいと思っていたのが実現して本当にうれしく、短い時間ではあったが、その場の雰囲気を十分に味わった。

山を降りる時はまた一苦勞で脚を深く曲

げると痛いので「もしも歩いて降りるのが無理なら、地面に座りながら一段一段降りても良い」と思っていたのだが、「さんが機転を利かせて、脚を深く曲げて降りなければならないところでは、後ろから自分の膝を私の膝裏に充てて台のようになり受けをしてくださったおかげで、膝を痛めることなく無事最後まで降りることができた。

恩納村は今年全国各地で上映中の『沖縄スパイ戦史』（三上智恵 大矢英代 監督）に出てくる第二護郷隊が配備されゲリラ戦の戦場となった恩納岳のあるところだった。Sさんはこの映画製作の中で調査を担当されており、パンフレットにも「第二護郷隊隊長 岩波 壽という人」という文章を書かれていた。



第二護郷隊の慰霊塔

第二護郷隊の慰霊塔も案内してくださった。映画の中で一番印象深かったエピソードに、怪我したことに起因する脳症を患った護郷隊の少年兵高江洲義英さんは隊が恩納岳から撤退する時、足手纏いになるとして毛布を被せられ、軍医に銃殺されたという戦時の容赦なく酷い事実があった。その慰霊塔に高江洲義英さんの名前も刻まれており、「二度と戦争を起こしてはならない」という思いを込めて手を合わせた。

米軍の北部進攻を食い止める目的で護郷隊が破壊した橋の一つに赤橋という遺跡があった。橋を破壊した部分を米軍はすぐに土で埋めて補修して通ったので、進攻を食い止めることはできなかったが、北部へ避難しようとする住民が橋の処で足止めを喰い、荷車の荷物を捨てて逃げることを余儀なくされたそう。

沖縄戦で戦場になった恩納岳は、戦後の1957年より海兵隊訓練場の「キャンプ・ハンセン」として使用開始され、たびたび流弾事件や山火事が起きている。昨年4月にも集落から400mしか離れていない安富祖ダム工事現場で流弾事件が起きたそうで、戦争は終わっても基地がある限り、ここでも未だに住民の命が脅かされる事件が頻繁に起きている。

今回Sさんに案内していただけたおかげで、映画で観た『沖縄スパイ戦史』と現地の風景を繋げて感じることができ、とても有意義だった。

繁 朋子

今年二度目の沖縄

報告が遅れましたが、11/01～11/05 またまた沖縄に行ってきました。今回は3年前に初めて沖縄・辺野古に行った時と同じグループに同行させて頂きました。旅の報告をしたいと思いますが、今回も中身の濃い旅だったので、全部は書けませんが、印象深いことだけ書かせて頂きます。

●恩納村博物館



恩納村博物館・第1展示室(同館HPより)

恩納村は初めて行きましたが海は勿論、山も街並みも美しくリゾートホテルが立ち並び日本でも屈指のリゾート地だそうです。

村内で最も高い山である恩納岳はかつて保存のよい照葉樹林もあり、「ヤンバルクイナも生息している」とも考えられていましたが、遺憾ながら現在では米軍の実弾演習場となっているそうです。

ここも県内の他の市町村と同じく、やはり大戦(太平洋戦争)末期には凄惨な戦いが繰り広げられました。

さて博物館はそんな戦史以前の平和な頃の恩納村の「自然の恵みに感謝し、自然とともに生きてきた恩納の人々の暮らしぶりや歴史」を紹介してありました。

ここを訪れた時はまだ上のような大戦末期の戦史を聞く前だったので「ここは沖縄

にあっても平和な村だったのかなー」と勘違いしてしまいました。

それに滞在時間が一時間で私はトイレに行った事もあり(^_^あっという間に時間が過ぎ、展示室をざっと見ただけで終わってしまいました。

もし次に行くことがあれば、ゆっくりじっくり見たいと思っています。

●恩納村宇加地 コージガマ

午後は宇加地集落の南側にある「コージガマ」を見学に行きました。

「ガマ」とは沖縄方言で石灰岩により形成された鍾乳洞のこと。沖縄本島には南部を中心に約 2000 あり、それらは大戦末期の沖縄戦では、その多くが住民や日本兵の避難場所（防空壕）として、また野戦病院としても利用されました。

「ひめゆりの塔」で有名な沖縄陸軍病院第三外科壕跡もガマの一つでした。避難場所（防空壕）として利用されていたガマでも「先に逃げ込んだ住民を後から来た日本兵が銃剣を突きつけて追い出し居座り、追い出された住民たちは全く無防備なまま逃げ惑った」という事もあったそうです。

ただ、私達が見学したコージガマでは他のガマよりはマシで、相当数が米軍兵に確保され生き残ったガマだった」とのことです。（無論、米軍に確保された人は相当長い期間収容所には入れられたのでした）

ちなみにコージガマは宇加地集落の南側にある小高い山の中腹にあります。

小高い山とは言えその道は陰しく、山道入り口から少しだけは悪路ながらもなんとか電動車椅子で行けましたが、途中からは階段になっていて仕方なくグループの A さんに背負ってもらいました。（この A さんは 3 年前にも辺野古で抗議船に乗降するの

に栈橋から 2 ～ 3 m もあるハシゴを私を背負って下さった方で普段は度厚かましい私も「有り難くも非常に申し訳なく」思いました）

この階段は勿論誰でも登下山しやすいように人工的に作られたもので金属製の手すりもありましたが、登山道を階段状に削っただけで舗装はなく、しかもかなり以前に作られたようで一部崩れかけていた所や手すりが グラついている所もあったようで、余計に大変そうでした。

それにしても、私のような重度障害者をここまで連れて来て頂けるのは日本中探しても多分このグループだけではないかと思っています。



●辺野古 海上行動

4月に来た時には主にキャンプ・シュワブゲート前での座り込みなどの行動に参加していましたが、今回は海上行動に参加させて頂きました。

と言っても、言うまでもなく船の操縦は船長さん任せですし、「私達は船に乗せて頂いて見学するだけ」ですが…。

私達のグループは「不屈」と「平和丸」という二隻の抗議船に分乗して乗込みました。私と朋子と他数名が「平和丸」に乗り込み、その他の方々は「不屈」に乗り込みました。

「不屈」は先に出航しました。その後、私達が「平和丸」に乗り込んで出航してすぐ、船長さんから説明がありました。（私は半分くらいしか聞取れなかったのと記憶も曖昧なので、その後の展開や状況からの類推も含めて書くと）「昨日から工事が再開し、フロート（埋立工事のための立入制限区域と称する海域の境界線を示す浮き玉）の設置作業をしています。工事の遅れで苛立っているせいか海保（海上保安庁）も殺気立っている様子で、我々がフロートを設置する作業船に少しでも近づこうとすると海保が過剰に反応し、我々を阻止しようと近づいてきます。今日はこの平和丸に報道カメラも乗って頂いているのであまり無茶は出

来ませんが、その代り「不屈」がガンガン攻め、私達はそのフォローにまわります。状況によっては我々も海保の阻止行動に巻き込まれる可能性もありますが、その時は落ち着いて冷静に行動して下さい」みたいな話だったと思います。

それからカヌー隊と合流し、「平和丸」がカヌー隊をロープで繋ぎ牽引し始めました。「少しでもカヌー隊の体力を温存するためだろう」と理解しました。

しばらくしてカヌー隊を切り離しました。作業水域に近づいたためでした。それからすぐに船長さんが持っているトランシーバーに連絡が入りました。なんと「不屈が作業船に少し接近したところ海保に航行停止を求められ停止したところ海保の保安官が乗り込んできた」という内容でした。とにかく急いで現場に向かうことになりました。

その現場らしきところにと接近すると、作業線と思われる一隻だけひととき大きな船と、その地殻に抗議船と反対派のカヌー隊それと海保の黒いボートが接近しているのが見えました。

現場に近づくに連れ、私達が乗る平和丸にも海保のボートが接近してきて、気が付けば左右から挟まれていました。

すると船長は強い口調で「近づくな！ 君たちが近づくと波が立って揺れるだろう





中央の白い船が「不屈」

が！！」と言われたが海保側からの反応なし、2、3度繰り返すも海保のボートは離れる様子はない。まさに「一触即発の状況」かのように思えた。

次の瞬間、船長は少しスピードを緩め、海保のボートに向かって何か手で合図を送るような仕草を初めた。そして数分後、海保のボートがこちらから離れながら、手振りで「OK！わかった！」らしきサインを返してきた。どういう会話だったのか知るすべもないけれど、とにかくホッとしました。

一方「不屈」の方は、行ってみると何艘もの海保のボートに囲まれて、何人もの海上保安官に乗り込まれていました。

その後も乗り込んでくる海上保安官は増え続け、乗っている全員が船上で30分以上も拘束されました。

3年前に来た時は確か護岸工事が始まったばかりで海上に立入制限区域を示すフロートが浮いていただけで、そこを超えても海保のボートは姿を現さず、もっぱら海岸から沖縄防衛局に雇われた ALSOK の警備員が思いっきり大音量のスピーカーで「航行中の民間船舶に告げます。この

海域は立ち入り制限区域となっています。民間船舶はただちに退去して下さい」と延々と繰り返すばかりでした。

「あんなに同じ言葉を繰り返すだけならば録音しておけばいいのに…」と思いました。

ちなみに実際 2016 年 5 月の地元新聞・沖縄タイムスによると「キャンプ・シュワブゲート前を中心とした陸上の警備業務は総合警備保障（ALSOK、東京）、辺野古沖の海上はライジングサンセキュリティーサービス（東京）が独占している。陸上が約 19 億円と約 15 億円、海上が約 23 億円と約 20 億円で警備会社と契約した」と報じています。警官や海上保安官に危険手当などを出すよりは安いのかも知れませんが、基





地建設にかかる費用全体から見れば微々たるものかも知れませんが…。

<とりあえず軽くまとめ>

それにしても辺野古に行く度に「それなら基地建設にかかる費用総額は一体いくらになるんだろう？確かその全額を日本（国民の税金）から負担することになっている。それで日本が少しでも安全になるのだろうか？いや、万一戦争になれば相手国はまず基地を狙うだろうしかえって危ないのではないだろうか？それらをどれだけの日本国民が気付いたり、疑問に思っているのだろうか？」と考えて心配してしまいます。

「何がどうであろうが政府が決めたものは必ず作られる。今更反対しても無駄に決まってる」と考える日本国民も多いと思います。でも私は辺野古・高江など沖縄の戦中から現在に至るまでの極めて理不尽な現状を知ってしまった限りは例え無駄でも放ってはおけないし、少しでも将来の戦争にブレーキをかける事につながるかも知れないと思っています。

前回の報告でも書きましたが「障害者は戦時下では足手まとい。良くて施設送り、悪くすれば自国政府に殺される」事を障害者は自覚すべきです。

「戦争にならないように防衛する必要があるんじゃないか！」と考える人は障害者・健常者を問わず多いと思います。そんな方は是非沖縄の戦史関係の資料館などに行って「過去（特に太平洋戦争末期）に沖縄で何が起こったか？」を是非見聞きしてほしいと思います。

●再開と出会い

沖縄にはこの3年間で4度行き、沖縄の知り合いも何人か出来ました。そんな知り合いとの再会や新しい出会いも楽しみの一つとなりました。

・Takao Ponntekasu さん

Ponntekasu さんとは3年前に最初に沖縄に行く少し前に facebook で知り合い、facebook 友達になりました。

少し前までは高江のやんばるの森の中で

サバイバルのような生活をされていましたが、今年夏の台風で自宅が損壊し、大宜味山の知り合いの家で暮らしてられます。

優しくて博学ながら、ユーモアもあり人間味にあふれる方です。勿論、基地反対運動もやってられて、辺野古や高江で座り込みをされてきました。

今回も初日に宿の照屋さんに来て下さり、4月よりもお元気そうで安心しました。



・謝花悦子さん



謝花さんのプロフィールは「NHKアーカイブ」を始めとする多くのWEBサイトで紹介されているので省きます。(お名前を検索すると動画や資料が多数見つかります)現在は反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」の館長として、戦中・戦後体験の語りべとしてご活躍されています。

謝花さんは4才で発病され高熱と激痛に苦しめられました。(病名は不詳?)

戦時下の中、熱と激痛に連日しみながらも、紆余曲折を経て辛うじて戦火を逃れて終戦を迎え、世の中が落ち着くのを待って、沖縄本島の病院に痛み止めの薬を貰いに行った際に、医師から「この病気ならば発病当時に適切な薬を飲めば治ったのに」とい

う思ってもみなかった言葉を聞きます。その言葉に「あの地獄のような苦しみは何だったんだ!?戦争さえなければ!!!」と全身に怒りが込み上げてくるのを感じたそうです。その後、三度に渡る大手術を受け、ようやく松葉杖で歩けるまでになったのです。

以上「もし謝花さんが読まれたら怒られるのではないか?」と思うほど省略しての謝花さんの少女期の闘病記でした。

ちなみに現在の謝花さんは車椅子で、3年前は手動でしたが私達の簡易電動を見て「それ楽そうでいいわね」と言って下さいましたが、今回は簡易電動に乗っておられました。「ひょっとして…」と思っただけに何気にちょっと嬉しくなりました

それと今回は「来場記念に全員のお名前を教えて下さい」とのことで、一人ひとり名前を書きました。私が最後に書き終えて謝花さんにお渡ししたら「あれ同じご名字なんですね?」と聞かれたので「夫婦なんです」と答えたら大層驚かれて「あらっそうなの!それは良いですね!!」と言われ、「じゃーっ二人で施設で暮らされてるんですね」と尋ねられたので、「いいえ。自宅で二人共にヘルパーさんに入ってもらって暮らしています」と答えると、また心底驚かれた様子で「へーっ、そうなのー」と。

[年代格差+地域格差+個人差]のせいかなー!?とその大きさに少し驚きました。

●木村浩子さん

木村浩子さんは知る人ぞ知る(私は3年前に沖縄に来て伊江島の「土の宿」に泊まるまで知りませんでした)重度障害者で施設を出て地域での自立生活を始めた日本では草分け的な存在の方です。

以前は「沖縄・土の宿」と「オーストラ

リア・土の宿」の両方を自宅とし、交互に住まわれていたが、現在は宜野湾市にある某宿泊施設の一室を自宅として使いわけているようです。たまたまか何かのご縁かどうかは分かりませんが、今回同行させて頂いたグループも毎回この宜野湾市の宿泊施設を利用しているとのことです。

今回も最後の夜はここに泊まり、それで先ず夕方ころに到着後すぐにグループ全員でお会いし、その最後に光栄にも私達二人に声をかけて下さり「良かったら、今夜私の部屋に来てお話ししましょう」とお誘いを受け、謹んでお受けさせて頂きました。

グループの打ち上げを兼ねた夕食を途中で抜け出て宿に戻り、木村浩子さんのお部屋を訪ねました。確か8時過ぎにお邪魔して9時頃まで約一時間お話ししました。今でも国内便はお一人で乗られるそうで、オーストラリアなど海外にも行かれるそうですが、海外には主にご自分の個展を開かれるために行かれるそうです。

「残念ながら私達はオーストラリアにはまだ行ったことがないんです」と言うと、「じゃ～ぜひ新婚旅行にどうですか？」とお誘いを受けました。

何の話からかは忘れましたが木村浩子さんが「中村敦夫が好きなんです」と仰ったので、朋子が「来月、大阪なのですが中村

敦夫の『線量計が鳴る』という朗読劇があるんですが行けますか？」と聞くと、「ああっそれ行きたいです！」ということで話がまとまりました。

という訳で何かのアクシデントがない限り、来月（12月）に再びお会いできる事をお約束して木村浩子さんのお部屋を後にしました。



●山城博治さん

沖縄問題や平和運動に興味のある方ならば知らない人は居ないと思いますが、残念ながら私の知り合いではありません。

この日の午後は辺野古あたりをウロウロしていたのですが、メンバーの何人かが「トイレに行きたい」と言ったので、「それならいつもトイレをお借りしているカフェ兼辺野古グッズ販売兼事務所の『沖縄平和サポート』で借りよう」という事になり、私達だけクルマで待っていたところに突然、山城さんが現れて「こんにちは。また来てくださっんですね。ありがとうございます」と言ってくださったので、「たぶん他の障害者と人違いされてるんだろうな（^^ゞ）」と思いながらも、「いやっ、どうも恐縮です」と言ったつもりですが、ミーハーな私のこと、かなり舞い上がっていたので、どこまで通じたかは定かではありません。（^^ゞ

繁周作



沖縄訪問写真集（2018年11月1日～5日）



平和丸に乗船



米軍の水陸両用車（辺野古）



辺野古での行動の翌日の新聞



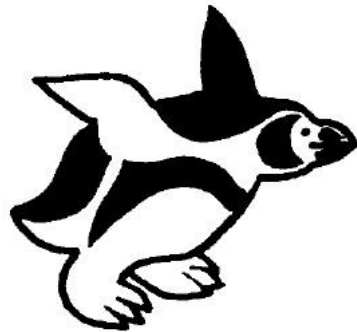
反戦平和資料館を見学



伊江島の団結道場（改修中）



海辺のブランコ（伊江島）



自立障害者グループ ペンギンの会

〒612-8411

京都市伏見区竹田久保町 62 番地

足立ハイツ竹田 132 号

(地下鉄烏丸線 くいな橋駅 徒歩 4 分)

電話 : 075-755-8177 (FAX 共)

E メール : penguin.kai@gmail.com

ホームページ : <http://penguin-kai.jpn.org/>

「ペンギンの会」で検索